

平行線がゆれる

芸術研究科 造形表現専攻
写真・映像領域 博士前期課程
2024年3月修了

鶴岡佳奈

主査 百瀬俊哉 副査 大日方欣一 佐藤慈

研究背景

スマートフォンの普及から、誰でも簡単に写真が撮れる環境となった。写真を撮るという行為は、出来事に対して距離を生み、俯瞰的に物事を見つめることにも繋がる。カメラという存在は、人々にとって、もうひとつの目とも言える。写真は、撮影者だけでなく、鑑賞者に対しても新たな世界を伝える鍵のような存在である。非日常が、誰かにとっての日常であることを教えてくれる。写真の中での存在と距離に着目し、「写真を通じて人を見つめるとは何か」を探究する。

研究目的

これまで、様々なコミュニティで撮影する中で、他者の存在とは何かを探究してきた。しかし、写真を通じて他者を語る事について考察する中で、イメージに包まれるような感覚に対して怖さを感じるようになった。そこで、まなざしの抽象度を上げて、物事を見つめる事にした。

本制作では、身近な存在と環境に向き合う中で、自己と他者の視点から「人にとってのらしさ」とは何かを探究する。

研究概要



成果・まとめ

本制作では、他者を撮影する時、目の前にいるものがはっきり見えないけれど、姿は捉えられるような状態で他者を見つめた。このまなざしは、他者の姿を俯瞰的に捉える事が出来、目の前に在るものからは、そのものらしさを受け入れることができる。また、ここに写る他者の姿は、他者をかえした「自己の姿」でもあった。他者を見つめることは、自己を見つめる事にも繋がった。



指導教員コメント

作者の周りにいる人や環境から、自己と他者を探究した作品である。自己と他者という存在は、それぞれ独立した二つの線の上に存在していると仮定し、この二つの線は混ざり合うことは無く、個としての存在に近いことを、これら写真の連作で表現している。今後、継続して写真活動をすることを期待している。